

4 食肉処理施設で発見された牛の筋肉病変

○松田克也 (豊橋市食肉衛生検査所)
陣内 俊 (")
瀬尾幸嗣 (")
齋藤 富士雄(豊橋総合動植物公園)

【はじめに】平成17年5月、当所が所管すると畜場で処理した牛(交雑種 去勢 26ヶ月齢)をA食肉処理施設でスライス加工したところ、大腿部及び肩部の筋肉に米粒大の病変が散在していたとの連絡があった。当所では病変を精査し、原因を究明するとともに、愛知県東三河家畜保健衛生所と協力して農家指導を行ったので、その概要について報告する。

【材料及び方法】(1)病理組織検査：定法に従い病変部の組織標本を作製し鏡検した。(2)微生物検査：病変部を含む筋肉をGAMブイヨン培地、クックドミート培地に接種し、嫌気培養ジャーを用いた炭酸ガス置換法で37℃48時間嫌気培養した。(3)寄生虫検査：病変部を含む筋肉5gを細切し、0.2%トリブシン加生理食塩水50mlを加えて15分間消化後、ガーゼで濾過し、ろ液を3000rpm10分間遠心した。上清を捨て、沈渣に生理食塩水を3滴加え攪拌したものを鏡検して虫体の有無を確認した。

【成績】肉眼検査では、大腿部及び肩部の筋肉に茶褐色で針頭大～米粒大の散在する病変を認め、病変の中心に硬結した結節を触知した(写真1)。病理組織検査では病変部に好酸球を主体とする炎症細胞が集簇しており、中心に向かって壊死傾向を強く認めた(写真2)。一部の病変には、楕円形で内部に好塩基性顆粒を含む物質がみられた(写真3)。また病変部付近の筋線維内にサルコシストを認めた(写真4)。微生物検査、寄生虫検査では有意な細菌、虫体を検出しなかった。

【考察】寄生虫検査で、サルコシスト、又はブラディゾイトが検出されなかったものの、当該筋肉病変は好酸球性肉芽腫性炎の像を呈しており、病変の周囲筋肉内にサルコシストが確認されたことから住肉胞子虫の感染によることが疑われた。これらの検査結果をもとに、家畜保健衛生所は農家に対し、住肉胞子虫の終宿主である犬、猫などを牛舎付近に近づけないよう指導した。

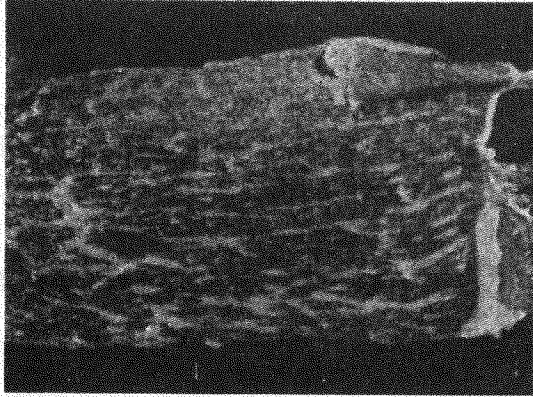


写真 1

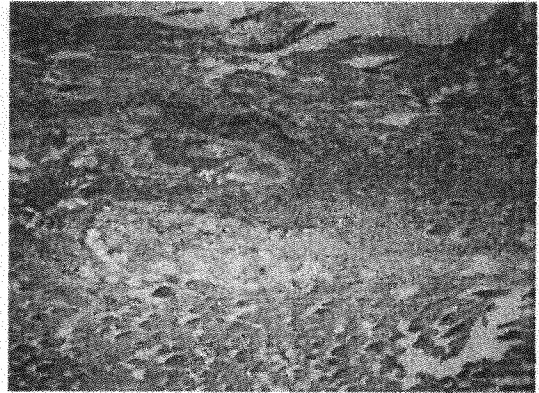


写真 2

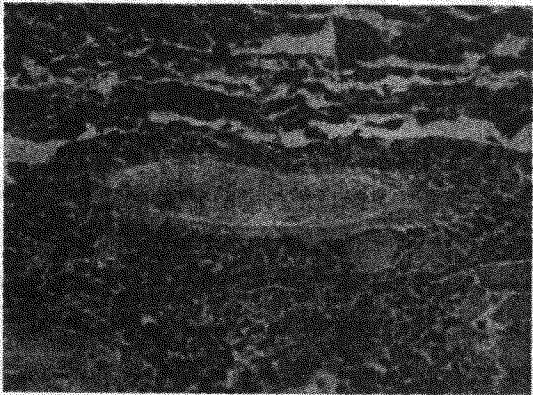


写真 3

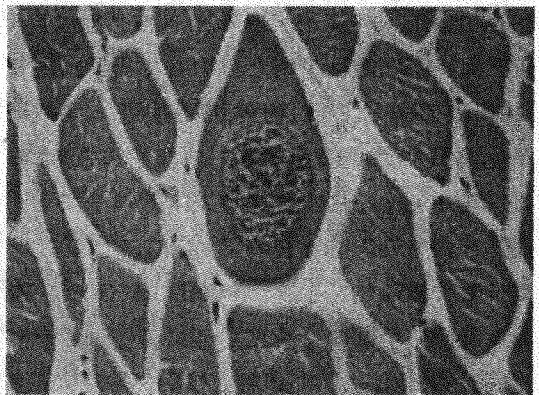


写真 4